

## 参加報告 TCSセミナー11 李琴峰氏講演会

### 「接点に立脚し、境界を漫ろ歩く——創作における日本、台湾、そしてマイノリティ」

陳奕汎

国境や言語を跨ぐ〈越境性〉は、多様なルーツを持つ作家による作品を包括的に把握する〈日本語文学〉や〈越境文学〉という枠組みにおける核心的な概念であり、その文学的価値の所在ともなってきた。しかしながら、作家の権威性が失墜しつつある現在、次のような疑問が浮かびあがるのではないだろうか。文学の〈越境性〉は、依然として、国境といった明確に規定された境界線を越える作家の行為に帰せられるものなのか。2021年12月10日に開催された芥川賞受賞作家・李琴峰氏の講演「接点に立脚し、境界を漫ろ歩く——創作における日本、台湾、そしてマイノリティ」は、このような疑問に応答するものであった。

もともと2020年2月28日に予定されていた今回の講演会は、新型コロナウイルスの影響で1年近く延期され、感染状況が比較的落ち着いた2021年12月により開催された。当日の会場、名古屋大学文系総合館カンファレンスルームには約50名の参加者が集まった。

李琴峰氏の講演は、「台湾同志文学について」と「私の創作について」の二部構成となっている。前半の部では、紀大偉氏『同志文学史：台湾の発明』（同志文学史：台湾の発明）に基づいて台湾同志文学の話が展開された。「同志文学」というのは「ジャンル」であり、また、〈日本文学〉のように文学作品を収める容器としての「フィールド」でも

ある。この紀氏の論考を確認したうえで、李氏は性的マイノリティを指す〈同志〉という用語の誕生の歴史について説明し、台湾の歴史・社会状況と照らし合わせながら、台湾同志文学の歴史を遡った。その中で特に印象に残ったのは、1990年代以前の代表作とそれ以降の作品を比較することを通して、性的マイノリティ表象の多様化が見受けられる2000年代以降の作品を「新世紀の同志文学」として位置づけるという考察である。

講演の後半部では、李氏自身の執筆活動について語られた。はじめに取り上げられたのは、李氏のデビュー作『独り舞』である。『独り舞』は中国古典文学からも、台湾と日本の「セクマイ文学」からも影響を受けているため、〈日本文学〉なのか〈台湾文学〉なのかといった枠組みに収まり得ない、複数の境界に立脚する作品である。李氏はこうした見解を述べたうえで、文学作品に〈日本語文学〉や〈LGBT文学〉などのラベルを貼ることに對して、「安易な理解に繋がりがかねない」と、批判的な姿勢を見せた。その理由として、秩序整然としたラベリングの世界と、紛然雑然とした物語世界は、そもそも完全に乖離しているからだという説明が加えられた。

台湾出身でありながら、日本語で創作を続ける李氏の作品には「越境性」という評言が度々付される。このことに関して、李氏は作家自身の越境性＝文学の越境性という図式を否定し、その代わりに、さまざまな登場人物を想像して書くという作家の執筆活動ないし読者の読書行為自体が〈越境行為〉になり得ると指摘した。とすれば、小説に「普遍性」や「共感」、「感情移入」を執拗に探し求めることは、他者と世界への繋がり、つまり越境の可能性を拒否し、自らの殻に閉じこもることとなる。それこそ「マジョリティの傲慢」にほかならないと強く主張した李氏は、講演の終盤において、マイノリティを描く際、「安易に『みんな同じ』と結論付けるのではない、『違い』をしっかり見つめた上で丁寧に描く」ことの大切さを、参加者に向かって呼びかけた。

第11回 シンタズ 現代作家の声を聴く  
接点に立脚し、境界を漫ろ歩く——  
創作における日本、台湾、そしてマイノリティ

李琴峰 作家・日中翻訳家

日時：2021年12月10日（金）15:00～17:00  
場所：名古屋大学文系総合館カンファレンスルーム  
定員：50名（名古屋大学文系・人文系研究科のメンバーのみ）  
入場無料・参加申込みフォーム記入必須（11月27日締め切り）

李琴峰（ゆきこみ）  
作家・日中翻訳家。1989年、台湾生まれ。2013年末日、おりに早稲田大学大学院修士課程修了。17年、『独り舞』で第1回日本文学賞を受賞しデビュー。19年、『左の腕は右の三日月が』で芥川賞候補。第14回文芸春秋賞候補。21年、『ボクリスが降りてく』で第14回文芸春秋賞。『国境を漫ろ歩く』で芥川賞を受賞。他の著書に『星月夜』など。

講演後の質疑応答のセッションでは、今回の講演会にあたって院生たちが事前に行ったワークショップのメンバーによる質問タイムが設けられた。はじめに、第165回芥川賞を受賞した『彼岸花が咲く島』の読み方について、数名が質問した。質問者の一人であった筆者は、物語の設定に着目し、フェミニズムSF小説の系譜に触れつつ、ユートピア、あるいはディストピアを書くことについての考えを尋ねた。李氏は、ジョージ・オーウェル『1984』をはじめとするディストピア作品を参照して本作を執筆したと言いつつ、ユートピアとディストピアがそれぞれ独立した存在とは考えられず、両者は常に表裏一体の関係にあるという見解を示した。ほかには、エンディングの読み方や、批判的な選評の受け取り方、与那国と沖縄を物語の舞台となる「島」のモデルにした動機についての質問も出された。

次に、話題はレズビアン表象への関心に移り、老いたレズビアンを描くことやレズビアン表象の変遷に関する質問が出された。李氏は後者について、希望が積極的に書き込まれたレズビアン表象が近年増えてきたが、それは、死と結びついた従来のレズビアン表象を捨て去るべきものだという意味ではない。むしろ、世代間の経験の差異を包摂できるような、多様な表象のされ方が必要であると述べた。李氏の返答を聞いて、筆者は、LGBTを含むマイノリティを取り巻く状況が改善されつつある現代においても、困難や生きづらさを抱えている人々がいるという現状についてあらためて認識を深め、マジョリティとの違いのみならず、マイノリティ内部における差異を見取ることの重要性を理解した。

院生による質問タイムの後、フロアからも活発に質問が挙げられた。『ボラリスが降り注ぐ夜』『生を祝う』をはじめとする李氏の作品についての感想・質問のほか、作品のメディア・ミックスに関する質問も参加者から寄せられた。その際、李氏からはメディア・ミックス企画の提案はまだないという返事を得たが、筆者が本稿を書いている時点ですでに、『彼岸花が咲く島』のオーディオブック化がなされている。さっそく聞いてみたが、作中における実験的な言語表現が音声化されることで、黙読という読書行為とは異なる感覚体験を創り出すことを興味深く感じた。

小説をはじめ、映画、漫画といったメディア作品の物語を消費し続けている私たちは、読む・観ることを通して日々多くの他者に出会い、追体験をしている。それにも

かわらず、私たちは思いかけず、ジェンダー、人種、国籍など複数の〈枠組み〉に頼って世界を理解し、つねに境界線を設けようとしがちなのではないだろうか。李氏の講演会を通して、筆者は〈枠組み〉による普遍化の暴力性と危険性を改めて認識することができた。他者との違いを丁寧に認めつつ、彼我の境界を越える〈小さな越境行為〉を実践することは、他者と世界をより知ることにつながる。それによって得られる感性が、ダイバーシティとインクルージョンが進んでいる時代に生きる私たちにとっては不可欠なものなのである。